

開成山のマウンド

安積高等学校長 久保田範夫(88期)

平成25(2013)年6月1日(土)午前9時、郡山市開成山球場にちょっとしたどよめきが起こった。その時、マウンド上にいたのは私であった。(そのどよめきが、山なりの投球をほとんどの観客が予想していたのに、「60歳に近い校長にしては、まともな球が行ったな」という驚きだったのかどうかは知る由もない。)

・・・「第7回安積高校・安積黎明高校野球部定期戦の始球式を行います。始球者は、久保田範夫安積高等学校長です。」その球場アナウンスは、現実のものではなく遠いところから聞こえてきたような感じだった。

始球式と言うと、女性タレントや野球に関係がない人が投げることが多く、ワンバウンドであったり、或いは山なりの投球だったりする。しかし、なぜか私はズバツとど真ん中の直球でストライクを取りたかったのだ。

私は、昭和63年から平成5年までの6年間、吉見出監督の時代に安積で野球部の顧問をしたことがある。昭和32年2月生まれの私は、まさに「巨人・大鵬・卵焼き」世代。みんな長島に、巨人に憧れていた。小学生の頃は野球をやろうかなと考えていたのに、友達関係その他からバスケットと陸上をやることになり、野球は本格的にやったことがない。(ただ、ソフトボールは大好きで、高校生時代も、教員になってからも大抵サードをやっていた。大学時代は、文学部内の研究室対抗の野球大会に参加し、吉見出さんが所属していた国史研究室には勝てなかった記憶がある。)いずれにしても、堀内、城ノ内、江川、槇原、桑田達がインハイに、アウトローに、そしてど真ん中に剛速球を投げ込み、打者をきりきり舞いさせている姿が私にとっての野球なのである。(村山、金田、村田兆治、野茂といった選手も思い浮かばないことはないが、オーソドックスなフォームで投げる右ピッチャーというと、巨人の投手を思い浮かべてしまう。)

ところで開成山のマウンドは、顧問時代にグラウンド整備の時、何度も登っているのだが、そこで投げることは、ましてや始球式で投げることは、やはり特別なことなのだと今回痛感した。「今年の始球式は安積の校長ですよ。」と言われたのが5月7日。それから自分なりにイメージトレーニングもし、5月中旬には2日間だけだったが、安積の1年生を相手に投球練習をしてフォームを確かめていた。

なのに・・・である。主審からボールを手渡され、ノーwindアップでゆっくり左足を上げて、投げ終わった直後に球場のどよめきを感じながらも、どんなフォームだったのか、球道がどの辺を辿ったのか、よく覚えていないのである。自分では「インハイのくそボールに

なってしまった」と思ったのだが、ネット裏に戻ってみると、「打ちにくいところに決まりましたよ。」（お世辞に違いないが・・・）「キャッチャーミットにズバッと決まったのは、7回の定期戦で、初めてですよ。」と言われ、びっくりしてしまった。自分でも気づかずにいつの間にか「ハイ」或いは「夢うつつ」の状態になっていたのかも知れない。

ネット裏で「2日間練習して、肩と肘から先がかなり痛かったんです。」と私が言ったら、吉見監督時代の野球部長だった佐久間公民先生（79期）から「スナップをきかせて投げないからそうなるんだ。」と言われ、頷くしかなかった。

安積・安積黎明野球部定期戦は、当時の両校PTA会長さんや校長さん達の力もさることながら、当時黎明の吉見出部長（87期）、菅野京一監督（92期）の働きかけがスタートのきっかけとなったことを、6月1日の合同反省会で聞いたのだが、私が顧問をしていたときの監督が吉見さんだったのだから、不思議な縁としか言いようがない。私が顧問になった昭和63年から、佐藤薫君（102期）、滝口君（103期）の2枚看板を擁し、夏の大会で学法石川と2年連続で準決勝を戦ったことが鮮明に蘇ってきた。

今年は、母校の校長として、是非甲子園で校歌と「紫の旗のゆく所」を声高らかに歌いたいと強く願っている。

そして、もしチャンスがあれば、もう一度開成山のマウンドに立って、ど真ん中のストレートを投げ込みたいと、密かに願ってもいる。

<久保田のプロフィール>

福島県田村市大越町出身、昭和47年に安積高校に入学した88期生で、1年の担任は竹花栄明先生、2～3年は吉田清蔵先生（安積54期で、健在）。その後、国語教師として昭和61年から平成8年度迄11年間、母校安積の教壇に立つ。当時、恩師でもあった国語の長嶺力夫先生や吉田清蔵先生と一緒に緊張の日々を過ごした。この間、野球部の第3顧問を務める。その後、福島県教育庁に3度勤務し、学校経営支援課長（小・中・高校、特別支援学校の管理部門）として仕事をしている中、東日本大震災が発生、警戒区域等の学校再開に努めるとともに、教育次長として県内外に避難生活を余儀なくされている幼・小・中・高・特別支援学校の園児・児童・生徒約1万4千人をいかにして福島県に戻ってもらうか、頭を痛め続けた。

生徒として、一教諭として、そして今回校長として母校安積に3回関わるができる幸せをかみしめながら、高い志を持つ生徒達の夢を実現させるべく努めている。